

シンポジウムの趣旨

この度、パレスチナ人が難民化し、また世界中に離散するきっかけとなった「ナクバ」(第一次中東戦争とその直後の政治的、社会的混乱を指す)から60年目になるのを機に、広島で国際シンポジウムを開催する運びとなった。まず、被爆地・広島で開催する意義を指摘しておきたい。周知の通り、広島、そして長崎は被爆から63年を迎え、被爆体験者の減少と高齢化という大きな問題に直面している。このことは、広島や長崎における被爆・被災体験などをどのように記憶し、また継承していくのか、我々に大きな課題として突き付けている。そして、正に「ナクバ」が同様の問題を抱えているのである。確かに、パレスチナにおける「ナクバ」と広島における被爆は、それが起こった時期や場所、またその歴史的、政治的背景などは異なっている。しかしながら、両者は経験としての破壊や暴力、またその記憶と継承という共通する大きな課題を持っている。それ故、我々は「ヒロシマ」から「ナクバ」を、そして「ナクバ」から「ヒロシマ」を考える、つまり両者がそれぞれに抱える諸々の問題を双方向的に考えることによって、「ナクバ」や「ヒロシマ」を新たな視点から捉え直せるのではないかと、この強い思いを共有しているのである。

シンポジウムでは、まずパレスチナ側からローズマリー・サーイグ氏に基調講演をして頂く。彼女はレバノン在住の文化人類学者で、長くパレスチナ難民、特に女性の難民から口述記録を多数集める作業を行っており、「ナクバ」やこれに関連する様々な事柄の記憶とその継承に関して話して頂くことになる。次に、「ヒロシマ」からの視点として、気鋭の社会学者で、自身「原爆の絵」に関する著書のある、九州大学の直野章子氏から、被爆の記憶とはそもそも何なのか、そしてそれを我々は如何に聴き取るべきなのか、話して頂く。そして最後に、現代思想の分野で最も注目を集め、また『ガリアの婚礼』、『豊穡な記憶』などの作品で知られる映画監督のミシェル・クレイフィの日本招聘に尽力するなど、自身もパレスチナ問題に関わってきた一橋大学の鶴飼哲氏から、同じクレイフィの作品である『石の賛美歌』がパレスチナに、そしてヒロシマに問いかけたものが何だったのか、また民族間の境界を横断する記憶の生成の可能性はどこにあるのか、話して頂く予定である。

被爆63年目を迎えた広島で、60年目を迎えた「ナクバ」を考えることは、一方で核の脅威が減少するどころか、逆に増加している世界の今日の状況があり、他方で地域紛争が多発して当事者間の共存・共生関係の構築が希求されている情勢を見るに、大いに意味のあることかと考える。

我々は、この国際シンポジウムが、「ヒロシマ」の記憶と「ナクバ」の記憶が出会い、またそれらの記憶の継承の可能性について考える場になることを目指したい。
(宇野昌樹／広島セッション代表)

「ナクバ」とは

1948年5月、突然襲いかかってきた暴力により、パレスチナ人は故郷を追われることになった。中東の一角で、それまで平和に暮らしていた人々の生活は破壊され、家族は引き裂かれた。ヨーロッパにおけるユダヤ人差別の問題を押しつける形で、この地にイスラエルが建国された結果である。パレスチナ人はユダヤ人に代わって世界中に離散し、難民生活を送ることとなった。それから今年で60年が経つ。

「ナクバ」とは、パレスチナ人を襲ったこの離散による悲劇を表すアラビア語である。故郷における共同体は分断され、滞在先で支えあう小さな集団へと形を変えた。人々が生まれ育った家の多くは破壊され、400以上もの村が廃墟となって放置されたまま。当時80万～100万人とされる人々が、ヨルダン川西岸地区やガザ地区、周辺アラブ諸国などへ逃れたが、彼らの大半はその後、帰還を許されることもなく現在に至っている。

「ナクバ」はイスラエルとパレスチナ間の紛争の出発点である。イスラエル人にとっての独立記念日は、パレスチナ人にとって苦難の記念日となった。難民生活は二世代目、三世代目を迎え、故郷の地を知らない子どもたちがパレスチナ人という呼称を受け継いでいる。離散にあたってはパレスチナ人居住地の各地で虐殺が行われ、財産が没収された。問題の解決には、これら全ての補償が検討の対象に含められる必要がある。それを待つ間、重要な取り組みとして求められているのは、記憶を語り継ぐ作業である。実際にパレスチナの故郷を知り、「ナクバ」を体験した人々の多くは既に高齢に達している。

常に勝者によって綴られる歴史の中で、埋没しがちな紛争の犠牲者の足跡を記すことの意義は、パレスチナだけに当てはまるものではない。被害者に委ねられた「語り継ぐ」という行為のもつ重みは、ヒロシマにおける被爆の体験にも共通するものだろう。遠く離れた中東の地で起きたパレスチナ人にとっての悲劇は、わたしたちにとっても重要な示唆をはらむと考えられるのである。

(錦田愛子／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

プログラム

13:00～13:45

●趣旨説明、パレスチナ人研究者の紹介

13:45～14:45

●基調講演：ローズマリー・サーイグ

14:45～15:00

●休憩

15:00～16:00

●パネリストの報告：直野章子／鶴飼 哲

16:00～17:00

●全体討論

来聴申し込み

※2008年12月7日(日)を締切といたします。氏名と連絡先を明記の上、葉書、Eメールのいずれかでお申し込みください。なお、申し込みは先着順とし、100名を越えた時点で締め切らせていただきますので、ご希望に沿えない場合もあることをあらかじめご了承ください。

●葉書でのお申し込み：

〒731-3194 広島市安佐南区大塚東三丁目4番1
広島市立大学 国際学部 宇野研究室
「国際シンポジウム広島来聴申し込み」宛

●Eメールでのお申し込み：

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
附属イスラーム地域研究センター
E-mail:nakba2008@kias.sakura.ne.jp
件名を「国際シンポジウム広島来聴申し込み」としてください。

お問い合わせ

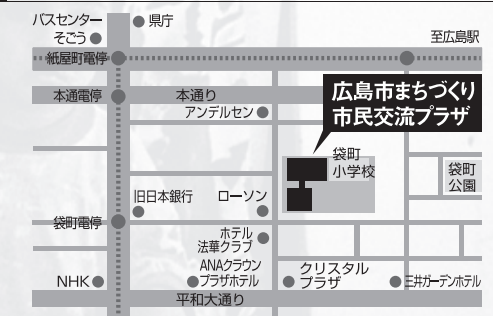
広島市立大学 国際学部 宇野研究室

TEL&FAX:082-830-1769

国際シンポジウム「ナクバから60年」Website:

<http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/kias/nakba2008/>

会場地図



シンポジウム関連写真展

ナクバの記憶／ パレスチナの現在

— 広河隆一、古居みずえ、

パレスチナの子どもたちによる写真展 —

開催期間：2008年12月11日(木)～14日(日)

10:00～18:00

会 場：広島市まちづくり市民交流プラザ

4階ギャラリーB

【入場無料】